

1 自己評価

I 評価結果

高質な学力を伸ばす【B】

A: 当初の見込みを超える取組を行うことができ、目標を上回る達成状況である。B: 当初の見込みどおりの取組を行うことができ、ほぼ目標どおりの達成状況である。

II 分析・改善方策

高質な学力を伸ばす

- (1) ICTの活用や探究活動を取り入れた、学びを深める授業づくり
 - ・授業参観回数が198回となっており、参観自体は行われているようである。目標の設定についても研修を通して理解が深まったという反応が多く見られた。学校自己評価アンケートでも「授業の指導内容や方法等について、教員相互の研修を積極的に行っている」の項目の数値が上昇しており、研修の効果が表れていると思われる。
 - ・ICT機器を効果的に利用することで、学び合いや発表の機会が増え、能動的学習につながっている。コロナ禍においてオンライン授業はICT機器の整備により速やかに実施できるようになった。
- (2) 立志につながるキャリア支援
 - ・キャリアカウンセリングは円滑に行えている。一層使いやすいくんせうがかる(教員用)を目指すとともに、ハースポ(生徒用)の考え方や書くべき内容指導していきたい。
 - ・自己評価アンケートの「生徒の適性、志望に応じた進路支援ができている」の肯定的回答は教員88%、生徒90%、保護者81%で、目標値90%に生徒は届き、教員・保護者は届かなかった。「よくあてはまる」の目標50%にも、生徒は届き、教員・保護者は届かなかった。
 - ・学校自己評価における、人権教育に関する肯定的な評価の割合は教職員64%・生徒85%・保護者61%だった。いずれも前年度を下回った。LHRの取り組みや人権課題の紹介などを人権便りで行ったが、さらに人権感覚の育成につながるよう検討していきたい。
- (3) 総合的な探究の時間の内容の充実
 - ・【1年生】キャリア探究からのつながりを意識し、研究テーマを絞っていくプロセスを体験させ、2年次のゼミ活動につなげることを目的として、「プレゼミ」を例年より前倒しして2学期後半から取り組んでいる。1年次の探究プログラム開発においては中部大学井上徳之教授に継続指導いただいている。
 - ・【2年生】調査やインタビューのための外部団体訪問も積極的に行っている。論文作成においては、Chromebookによる共同編集が進んでいる。校外での発表会等で5グループが活動成果を発表し、高い評価を得たグループもあった。
 - ・学校自己評価における「探究の学びや発表の機会がある」の生徒アンケートでも1年生2.36、2年生は1.77と高い評価である。
- (4) 主体性を育成するための評価方法の研究
 - ・現在7回の研究授業が実施されている。指導法(目標設定等)についての共有は進んでいるが、学習評価については来年度の課題である。
 - ・新教育課程での新観点の評価方法は生徒の自己評価シートの積み重ねを取り入れるなどある程度形になりつつある。学習の自己評価を定期的に行うことで自分の学習に対する取り組みの振り返りができ、次の学習に向かう意欲づけになっている。
- (5) 資格やコンテスト、国際交流等への挑戦
 - ・3月のエンパワーメントプログラムに1・2年生27名が参加した。
 - ・オンラインでの交流会も行うことができ、現在は海外研修実施に向けての企画等を行っている。
- (6) 生徒が主体となって企画・運営する行事
 - ・青陵祭は生徒の自主的な企画・運営力をたくましく育成することができた学校行事となった。
 - ・部活動や委員会が中心となって小学校との交流会等も行うことができた。

2 学校関係者評価委員名

森川政典(大原美術館副館長) 宮本浩治(岡山大学教育学部准教授)
 石田 隆(岡山教育事務所 指導主事) 武部洋治(同窓会副会長) 梶谷貴政(P T A会長)

3 学校関係者評価

- ・地域社会や国際社会を牽引するリーダーを育てるというスクールミッションを達成するために様々な取り組みをされており、今後さらに期待できる。
- ・各課で組織的に運営されていることが理解できた。
- ・オンライン授業のやり方や、1人1台端末の利用の仕方に関して、他校の実践を参考にしながら、さらなる改善をしてほしい。
- ・タブレットにも慣れていくと感じ、主体的に学びに向かっている印象を受けた。
- ・学校経営目標や目標達成のための具体的計画については素晴らしいし、解かりやすい。一方で、達成基準については、青陵が抱えている問題に向き合った上で、もう少し踏み込んだ基準を定めたほうがよい。
- ・国際交流活動のさらなる活性化に期待する。

4 来年度の重点取組(学校評価を踏まえた今後の方向性)

高質な学力を伸ばす 国際交流活動を充実させる